

ヘリグロチャバネセセリ *Thymelicus sylvaticus sylvaticus* (Bremer, 1861)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠA類(CR) (要件-①②)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張はおよそ 30 mm。黄褐色の地に黒褐色の縁どりがある小型の種。メスはスジグロチャバネセセリによく似ている。幼虫の食餌植物はカモジグサなどのイネ科。幼虫で越冬。成虫は年 1 回 6 月中旬に出現し、8 月まで見られる。イヌゴマ、オカトラノオ、ヒメジョオンなどの花でよく吸蜜する。

2. 分布

国外では中国、ロシア南東部、朝鮮半島に、国内では北海道西南部、本州、四国、九州に分布するが、中部地方を除いて生息は局所的である。県内では富士山麓の朝霧高原に多くの記録がある。また、飛び離れて静岡市葵区井川の県民の森、静岡市葵区大谷崩、浜松市天竜区佐久間ダム付近からも記録がある。

3. 生息環境

富士山では標高 700~1,000 m、静岡市では標高 1,500~2,000 m の山地から発見されている。浜松市天竜区佐久間町では標高 200 m に満たないところの記録である。樹林と草原が適度にまじりあった環境に生息する。

4. 生息状況

静岡市の記録は 1988、1994、1998 年、佐久間町の記録は 1972~1976 年及び 1983 年に採集されたものであり、2ヶ所ともその後全く記録はないうえ、好適な生息地が残されているとは考えにくく消滅したと考えられる。富士山西麓の生息地では、1990 年代までは個体数も多く安定して生息していたが、2008~2016 年まで記録がなく絶滅が危惧されていた。2017 年の調査で富士山西麓の一部に生息していることが確認されたが、厳しい状況には変わらない。

5. 減少の主要因と脅威

植生遷移 (54) と各種の土地利用 (16) により生息地となる草原が消失したことによると考えられる。

6. 保護対策

半自然草原が人の手により今後も少しでも残されることが望まれる。

7. 特記事項

富士山麓には生息地がわずかながら残っており、これらの草原の存続と詳しい生息調査が必要である。

8. 主な文献

福井順治 (1976) 佐久間・水窪の蝶類 (I) . 駿河の昆虫, (94): 2773-2775

清 邦彦 (1978) 静岡県および山梨県のスジグロチャバネセセリ属. 駿河の昆虫, (100): 2922-2928

諏訪哲夫 (1988) 静岡市井川峠でヘリグロチャバネセセリを採集. 駿河の昆虫, (144): 4145

天野市郎 (1994) 静岡市中部で再びヘリグロチャバネセセリを採集. 駿河の昆虫, (168): 4773

宇式和輝 (1998) 静岡市大谷崩でヘリグロチャバネセセリを採集. 駿河の昆虫, (183): 5140

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 (第 4 報) . 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

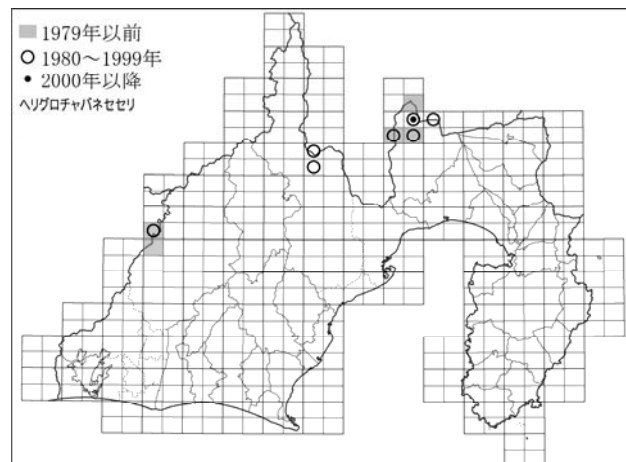
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



富士宮市産卵表面 2000年7月15日 諏訪哲夫採集



1. 種の解説

開張はおよそ 40 mm。表面はオスでは黒褐色の地に青い鱗粉がわずかに散らばることが多く、メスではこの鱗粉がない。裏面は薄い褐色の地色ではっきり目立つ黒い紋が並ぶ。幼虫ははじめワレモコウを食べ、成長するとクシケアリの巣の中でアリの卵、幼虫を食べる。成虫は年 1 回 8 月に出現し 9 月まで見られる。ワレモコウ、ハギ類などで吸蜜する。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸、サハリンに分布し、国内では北海道、本州、九州に分布する。いずれの地域でも生息地は限定されている。県内では富士山麓の富士宮市、裾野市、御殿場市から記録がある。

3. 生息環境

富士山の標高 600～1,000 m のワレモコウ、チダケサシ、カセンソウなどの草花が多い多様性の高い草原が生息地となる。

4. 生息状況

富士宮市では 1990 年代までは個体数、生息地とも安定していたが、各種の土地利用や開発をはじめ植生の遷移により生息地となっていた草原が失われ、2013 年以降発見できなくなっている。東富士演習場内の御殿場市では 1985 年まで記録があり、裾野市でもわずかな記録があるが、生息地は東富士演習場内立入禁止区域内であることからその後の詳しい状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

富士山麓においては各種の土地利用や開発 (16)

が進んだことに加えて、温暖化が一つの要因とも考えられる植生遷移のより早い進行 (54) により、本種の生息地となる多様性のある草原が失われたことが要因と考えられる。

6. 保護対策

半自然草原が人の手により今後も少しでも残されることが望まれる。

静岡県産は本州中部亜種に分類され、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種に指定 (2016 年) されている。

7. 特記事項

全国的に草原の衰退に伴って本種の減少も顕著である。神奈川県ではすでに絶滅している。

8. 主な文献

清 邦彦 (1987) 富士山麓の蝶類分布記録. 駿河の昆虫, (138): 3994-4001

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 (第 4 報). 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

諏訪哲夫・高橋真弓 (2007) 故小林國彦氏の蝶類標本 (Ⅱ). 駿河の昆虫, (220): 6101-6121

高橋真弓 (1970) 1968～1969 年富士火山蝶類分布調査報告. 駿河の昆虫, (69): 1991-2013

高橋真弓 (2000) 1995～1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (190): 5321-5332

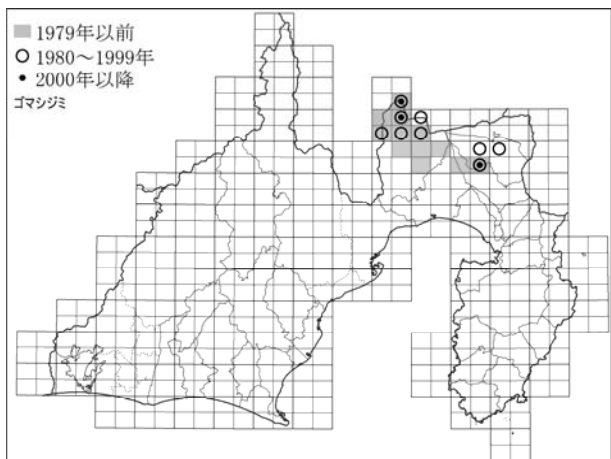
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa
富士宮市産♂裏面 2012 年 8 月 19 日 諏訪哲夫採集



アサマジミ *Plebejus subsolanus yaginus* (Strand, 1922)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN)]

1. 種の解説

開張およそ 35 mm。オスの翅表は黒褐色の地の上に中央から外側に向けて青色鱗が広がる、メスは暗褐色の地で後翅外縁近くに橙色の三日月形の紋が連続する。幼虫の食餌植物はナンテンハギ。卵で越冬。成虫は 6 月中旬～7 月に発生。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部からアルタイにかけて、国内では北海道と本州中部に分布する。県内では富士山西麓の富士宮市のみから記録がある。

3. 生息環境

食草のナンテンハギが生育する比較的乾燥した草丈の低い火山草原や荒地、農耕地の脇などが生息地となる。

4. 生息状況

県内では 1953 年に富士宮市上井出で初めて発見され、2000 年代の初めまで朝霧高原に限って生息していた。しかし各種の土地利用や植生の遷移の進行により本種の生息地となる草原が失われ最近では記録がない。

5. 減少の主要因と脅威

草原の放置による植生遷移の進行、草刈りの中止、耕作地の放棄などにより、ススキなどの背の高い草の生育 (53)、あるいは幼虫の生育期の過度な草刈りによりナンテンハギ群落が減少したこと (71) が主要な要因とみられる。

6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。適切な草原の管理を行えば復活できる可能性は残っている。

7. 特記事項

神奈川県では絶滅したとされている。

8. 主な文献

稲葉 茂 (1981) 富士宮市人穴付近の蝶の記録. 駿河の昆虫, (115): 3392

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶. 駿河の昆虫, (144): 4153-4155

清 邦彦 (2005) 富士宮市周辺の蝶の古い記録・1962 年. 駿河の昆虫, (210): 5829-5839

高橋真弓 (1998) 富士山麓におけるヒメシジミ、アサマジミ、ミヤマシジミの分布と生息地. 富士山自然誌調査報告書, pp. 6-26. 御殿場市.

高橋真弓 (2000) 1995～1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (190): 5321-5332

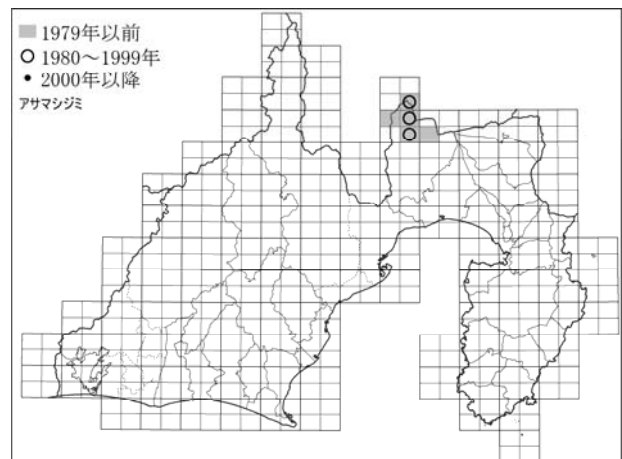
9. 標本

富士宮市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



富士宮市産♂裏面 1998 年 6 月 20 日 諏訪哲夫採集



ヒヨウモンチョウ *Brenthis daphne rabdia* (Butler, 1877)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

開張およそ 45~50 mm。表面は黄褐色の地に黒斑が散らばり、後翅裏面は外側半分が紫色を帯びている。幼虫の食餌植物はワレモコウ (バラ科)。幼虫で越冬。成虫は年 1 回 6 月下旬から発生し、8 月中旬まで見られる。草原を代表する種で、キリンソウ、カセンソウなどを好んで吸蜜する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部よりシベリアを経てヨーロッパまで広く分布し、国内では北海道、本州東北地方、中部地方に分布するが、いずれの発生地でも局地的である。県内では富士山西麓の富士宮市のみから記録がある。

3. 生息環境

富士山西麓の標高 700~1,000 m の、火入れ、草刈りなどにより維持されてきたワレモコウ、キリンソウ、カセンソウなどが生育する乾燥した草原が生息地となる。

4. 生息状況

1960 年代までは富士宮市根原から田貫湖、上井出の国有林などに比較的広く生息していた。その後徐々に生息範囲を狭め、野外活動センター東方では 1994 年に生息が確認されたが、その後この産地も消滅したとみられる。現在では朝霧高原のごく一部で少数の個体が 2016 年に確認されたのみとなっている。

5. 減少の主要因と脅威

草原の草刈りや火入れをしなくなり植生遷移が進んだこと (53) や、各種の開発などで生息に適する草原が消滅したこと (16) による。

6. 保護対策

特にこの種の保護のために対策はとられていない。草刈り、火入れを継続的に行い、この効果を期待したい。

7. 特記事項

全国的にも草原の衰退が進んでいることから生息地域は減少している。

8. 主な文献

清 邦彦 (1996) 富士山西麓の草原における蝶類群集の変化 [第 1 報] . 駿河の昆虫, (173): 4863-4880

諏訪哲夫 (1986) 富士山西麓の蝶. 駿河の昆虫, (133): 3853-3855

諏訪哲夫 (2010) 富士山西麓における草原性蝶 3 種の記録. 駿河の昆虫, 232: 6408

高橋真弓 (1987) 静岡県および山梨県南部におけるヒヨウモンチョウ類の分布と生息地 II. 駿河の昆虫, (137): 3959-3987

土屋忠男 (2011) 静岡県東部蝶の記録 (VII) . 駿河の昆虫, (235): 6482-6485

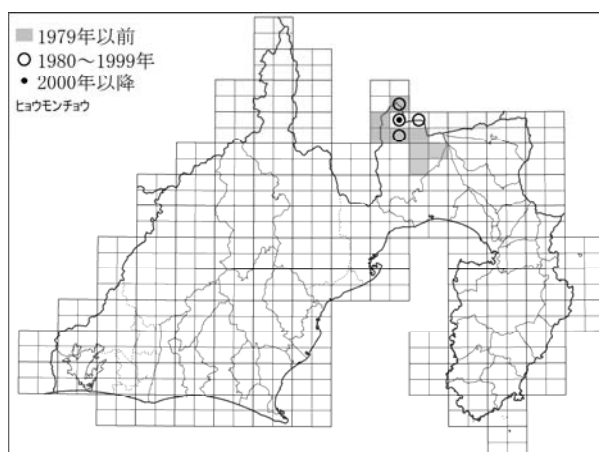
9. 標本

富士宮市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 T.Suwa

富士宮市産♂表面 2009 年 6 月 29 日 諏訪哲夫採集



(諏訪哲夫)

オオイチモンジ *Limenitis populi jezoensis* Matsumura, 1919

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

開張 90~100 mm。表面は黒褐色の地に白条を持ち、後翅の縁と白条の間に橙色帯をもつ。幼虫の食餌植物はドロノキ、ヤマナラシ。幼虫で越冬。成虫は年 1 回 6 月下旬から発生し、8 月中旬まで見られる。食樹の梢近くを飛翔し、時に溪流沿いの湿った地面において吸水し、動物の糞などでも吸汁する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国北東部よりヨーロッパまでユーラシア大陸の北部に広く、国内では北海道には比較的広く分布するが、本州では関東北部山地と中部地方の亜高山帯に分布する。県内では大井川の最上流部にのみわずかな記録がある。

3. 生息環境

ドロノキが生育する標高 1,300~2,000 m の溪流沿いが生息地となる。

4. 生息状況

1970 年代まではわずかに採集記録があるが、それ以後目撃情報はあっても、県内ではここ 40 年ほど確実な採集記録はない。

5. 減少の主要因と脅威

現在本州においては長野県と岐阜県の一部にのみ生息が確認されている。台風などによる出水でドロノキ林が流失するような被害 (55)、林道の整備などの環境変化 (24) が減少の原因と考えられるが、長野県、岐阜県では採集圧 (41) も懸念される。

6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。ドロノキの林と落葉広葉樹林を残すことが必要である。

7. 特記事項

2012~2014 年に二軒小屋、燕沢、聖平小屋などでの未確認の目撃情報がある。

8. 主な文献

- 加藤顕剛 (1953) 二軒小屋・榎島 (大井川上流) 附近の蝶類. 駿河の昆虫, (4): 55-57
- 諏訪哲夫 (2008) 県に寄贈された小松庄次郎氏の蝶類標本. 駿河の昆虫, (223): 6183-6191
- 高橋真弓 (1957) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 4 報). 駿河の昆虫, (17): 433-441
- 高橋真弓 (1965) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 12 報). 駿河の昆虫, (51): 1407-1417
- 高橋真弓 (1966) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 14 報). 駿河の昆虫, (56): 1540-1557

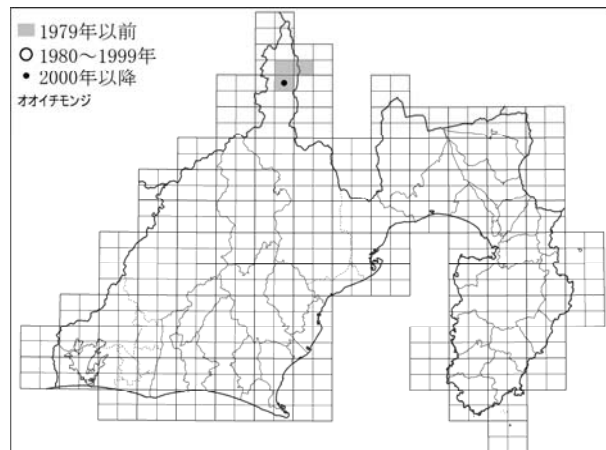
9. 標本

静岡市産 (4 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



静岡市産♀表面 1970 年 7 月 25 日 小松庄次郎採集



ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus arothius* Okada & Torii, 1945

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②③) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR)]

1. 種の解説

開張およそ 35 mm。表面は暗褐色、裏面は黄褐色で、後翅裏面には目玉模様が並び、銀色の細い線で縁どられる。目玉模様の数や形状は変化に富む。幼虫の食餌植物はイネ科、カヤツリグサ科などの草本で、県内ではショウジョウスゲが記録されている。成虫は年に1回、6月に発生する。

2. 分布

国外ではヨーロッパから南シベリアを経て朝鮮半島に至るユーラシア大陸南部に、国内では長野・群馬県にまたがる乾燥した草原、愛知・岐阜県を中心とした東海地方の湿地、中国地方の湿地と大きく三つの地域に分布する。県内では西部にのみに分布し、磐田原台地、三方原台地の縁（旧浜松市、旧浜北市）と湖西市及び旧三ヶ日町に記録がある。

3. 生息環境

洪積台地の縁や丘陵の谷に形成され、シラタマホシクサ、ミカワバイケイソウなど周伊勢湾要素と呼ばれる特異な植生が見られる、東海地方特有の湿地が主な生息地となっている。

4. 生息状況

三方原台地東側、磐田原台地と湖西市からは1970年代に姿を消し、三方原台地北側や旧浜北市は1980年代末には見られなくなった。現在県内で確実に産するのは、浜松市北区三ヶ日町のみである。

5. 減少の主要因と脅威

根本的には、開発などにより湿地が失われたことによる(15-1)。かつて本種を産した湿地はお互いの距離が比較的近く、個々の湿地は小規模であっても個体は相互に交流していたと推測される。開発によって湿地が孤立化し、個体群の交流がなくなって近親交配が進み消滅した場合も多いと考えられる(62)。特に本県から愛知県東部の産地では、希少化により一層採集者の増加を招いている。

6. 保護対策

県立自然公園条例、希少野生動植物保護条例により許可なく採集することは禁止されている。湿原が年々縮小しているので緊急に保護対策を検討・実施する必要がある。

7. 特記事項

雨生湿地は、植生や地質の面からも愛知県新城市との連続性が高く、広い範囲全体の保護・保全策が必要である。豊橋市の葦毛湿原では大規模植生回復作業が実施されており、個体数が回復しつつある。

8. 主な文献

石川由三(1962)6月中旬浜松市四ツ池の蝶. 駿河の昆虫, (38): 1058

大庭俊司(1970)磐田原台地のヒメヒカゲとウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (70): 2045

白井和伸(1989)愛知県・静岡県産ヒメヒカゲの生活史(第4報). 駿河の昆虫, (146): 4194-4195

高橋真弓・白井和伸(1993)静岡県におけるヒメヒカゲの衰亡. 日本産蝶類の衰亡と保護 第2集, pp. 125-128. 日本鱗翅学会・日本自然保護協会, 大阪・東京.

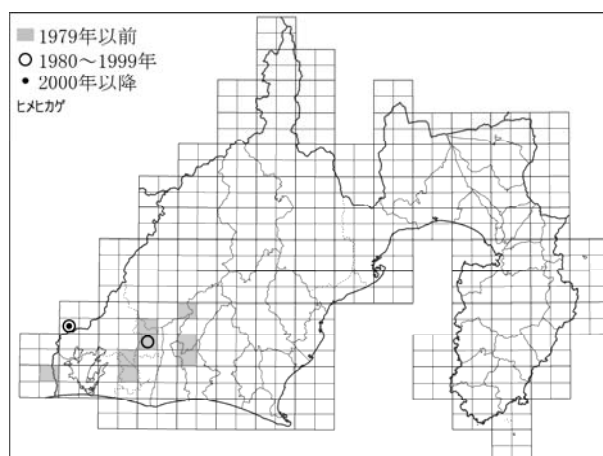
9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



袋井市産♂裏面 1974年6月9日 諏訪哲夫採集



ニホンカワトンボ *Mnais costalis* Selys, 1869

(=2004年版のおオカワトンボ)

カワトンボ科 Calopterygidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長はオス 50~68 mm、メス 47~61 mm。静岡県レッドデータブック (2004) ではおオカワトンボと呼ばれていた。ニホンカワトンボの中部日本以西の個体群であり、本県が個体群としての太平洋側の分布の東限に当たる。翅は地域によって複雑な多型がみられ、県内に分布する個体群は、オスが橙色型、メスが淡橙色型の組み合わせである。成虫はおおむね5月から7月上旬にかけて出現する。

2. 分布

国外ではロシア (千島列島) に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では浜松市に分布するほか、静岡市に記録がある。静岡、山梨、長野、新潟各県の西側を結ぶ線より東側にはオスは翅が橙色と無色透明の2型、メスは無色透明のみの組み合わせからなる個体群 (東日本個体群)、西側にはオスは橙色、淡橙色、無色透明の3型、メスは淡橙色と無色透明の2型が出現する個体群が分布する。

3. 生息環境

主に平地から丘陵地の、周囲に樹林があり流れ際に抽水植物が繁茂する、比較的開けた清流に生息する。同属のアサヒナカワトンボに比較すると、平坦で明るく開け、ややスケールの大きい河川を選択する傾向がある。

4. 生息状況

静岡市にも古い記録があるが、すでに絶滅している。現存する生息地は浜松市のごく一部のみで、比較的狭い範囲に集中している。

5. 減少の主要因と脅威

河川工事によるコンクリート護岸や横断構造物の設置など、河川環境の人工化や流路の変更などによる抽水植物の消失 (12、25)、河川工事による泥水の流入や家庭排水など (31) の人為的要因が考えられる。また台風による大規模な攪乱とそれに伴う流路の変化、抽水植物の消失など、自然災害 (55) による影響も減少要因となっている。

6. 保護対策

人為的な河川環境の改変だけでなく、自然災害による生息環境への影響も想定しておく必要がある。台風の影響による流路の変化や河床の攪乱は、産卵基質となる抽水植物の消失につながり、生息にきわめて大きな影響がある。

7. 特記事項

西日本個体群は静岡県より西の分布域では決して稀な種ではないが、分布境界にあたる本県では分布はきわめて限られる。地域ごとの多型現象など、個体群ごとの遺伝子レベルでの違いも、本県個体群の重要性の一つである。

8. 主な文献

福井順治 (1980) 浜北市・天竜市とその周辺のトンボの記録. 駿河の昆虫, (109): 3215-3221

福井順治・加須屋 真 (1998) 朝比奈博士による静岡県産トンボの記録. 駿河の昆虫, (182): 2091-5110

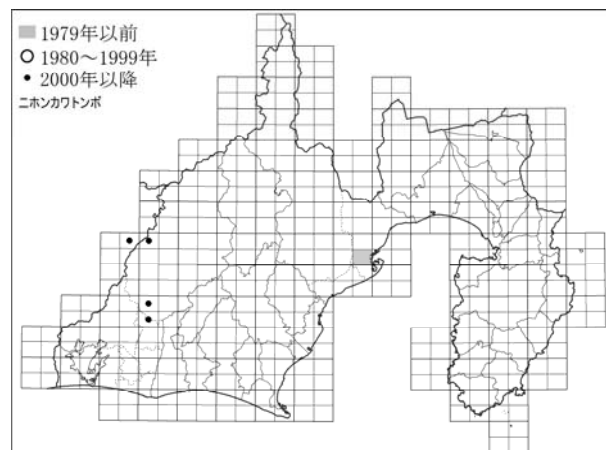
9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(加須屋 真)



浜松市 2015年5月2日 加須屋 真



キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* (Selys, 1883)

サナエトンボ科 Gomphidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

1. 種の解説

体長はオスメスとも60~69 mm。やや大型のサナエトンボで、翅胸前面の黄色斑は正面から見てL字を向き合わせた模様である。体色はオスメスともに黒地に黄色斑がある。複眼は成熟すると緑色になる。5~7月にかけて出現する。オスは流畔の植物の葉や石などに覆いかぶさるように静止し、縄張りをもつ。産卵はメス単独で主に水面や湿土に腹端を打ち付けて行う。

2. 分布

日本固有種で、関東以西の本州と、四国、九州に分布するが産地は限られる。県内での分布は点在し、伊豆半島の松崎町、伊豆の国市、西部の浜松市などに記録がある。

3. 生息環境

主に平地から低山地の、周囲に樹林があり、砂泥質の緩やかな流れに生息する。松崎町の産地では水田や休耕田の間を流れる農業用水路に生息している。同属のヤマサナエとは同所的に見られることが多いが、本種は局限される傾向がある。

4. 生息状況

確実な生息地は松崎町の1ヶ所である。水田の周囲を流れる細い水路の一角にのみ生息が確認されているが、現在耕作放棄された部分が多く、水路の水面を高茎の湿生植物が倒れ掛かり、開放水面を覆ってしまうため、本種の生息にとって非常に厳しい状態である。本種の分布が限られる要因としては、河川環境や水質、底質などに対する選択性が狭いことによるものと思われる。

5. 減少の主要因と脅威

生息環境のほとんどが、人の生活域と重なる河川中流域や農業用水路などである。そのためコンクリート護岸(13)などによる河川環境の変化、生活排水や産業排水、農薬の流入などによる水質の悪化(31、32)、加えて周囲の水田の耕作放棄(53)による水路の鬱閉化などの要因が考えられる。

6. 保護対策

すでに長期間にわたって確認されていない産地がほとんどであるが、人目につかずに残存している可能性もある。幼虫の好む底質の維持や復元、良好な水質の確保などが挙げられる。人為的な河川環境の改変だけでなく、耕作放棄による生息環境の悪化については、生息地の水路の開放水面確保など、適度な人の関わりが必要である。

7. 特記事項

全国的にも減少が著しく、環境省編(2015)の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

8. 主な文献

油井雅樹(1996) 松崎町でキイロサナエの生息地を発見. 駿河の昆虫, (175): 4917-4920

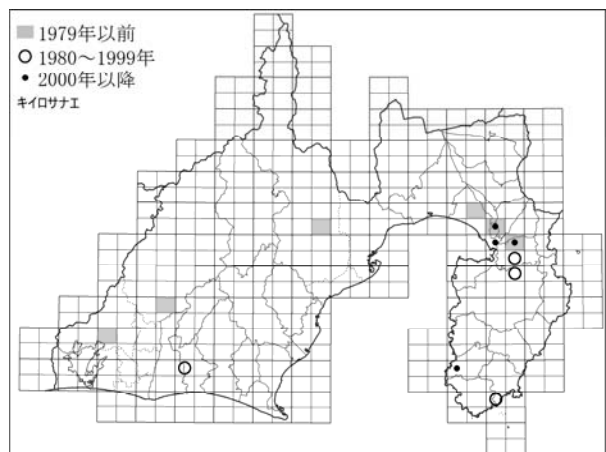
9. 標本

松崎町産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(加須屋 真)



賀茂郡松崎町 2005年6月1日 加須屋 真



フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys, 1854)

サナエトンボ科 Gomphidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②) 変更コード 1, 2

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

1. 種の解説

体長はオス 45~50 mm、メス 44~49 mm。小型のサナエトンボで、翅胸前面の黄色斑は正面から見てL字を向き合わせた模様である。胸部側面には通常2本の黒条があり、これが和名の由来である。体色はオスメスともに黒地に黄色斑がある。複眼は成熟すると緑色になる。5~6月にかけて出現する。オスは水際の植物や地面などに静止して縄張りを持つ。メスは単独で水域に飛来し、ホバリングしながら時々腹端を振って、卵をばらまく。

2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。静岡、岐阜、滋賀、福井各県以西に分布する。静岡市付近が分布の東限にあたり、県内はもともと産地が少ない。静岡市、島田市、掛川市、袋井市、磐田市、浜松市などに記録がある。

3. 生息環境

主に丘陵地や低山地に囲まれた田園地帯の、周囲に樹林があり、抽水植物や浮葉植物、沈水植物などが豊富な池沼に生息する。

4. 生息状況

静岡市の鯨ヶ池では1990年代前半、磐田市桶ヶ谷沼では1990年代中頃を最後に記録が途絶えている。現在確実な産地は静岡市の一産地のみであり、年変動はあるものの、個体数は決して多くはない。

5. 減少の主要因と脅威

コンクリート護岸などによる抽水植物の消失(12)、家庭排水流入による水質悪化(31)、水生植物の過剰な除去(71)、コイなど捕食性魚類の人為的な放流(52-3)などの要因が考えられる。水質の変化に敏感な種であると思われ、磐田市桶ヶ谷沼では大きな環境変化が認められていなかった1990年代中頃を最後に記録が途絶えている。

6. 保護対策

護岸工事など構造的な環境の改変だけでなく、家庭排水などによる水質の悪化やヘドロの堆積などに注意が必要である。また釣りをしやすくするための水生植物の過剰な除去や、釣りの対象となる魚類の人為的な放流が行われると、生態系そのものに影響を与える。釣り餌の過剰な投入も水質悪化やヘドロ堆積の一因となり、注意すべきである。

7. 特記事項

分布域全体で減少が認められるうえ、分布東限に当たる本県ではもともときわめて限られる。

8. 主な文献

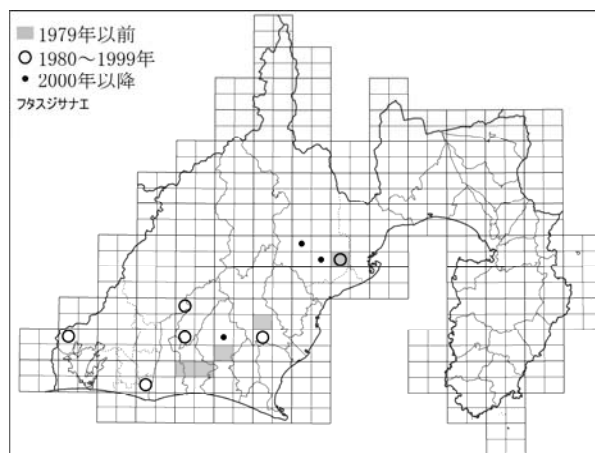
福井順治(1980) 浜北市・天竜市とその周辺のトンボの記録. 駿河の昆虫, (109): 3215-3221

9. 標本

静岡市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Kasuya
静岡市 2013年5月12日 加須屋 真



(加須屋 真)

トラフトンボ *Epitheca marginata* (Selys, 1883)

エゾトンボ科 Corduliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長はオス 50~56 mm、メス 50~58 mm。中型のトンボで、体色は黒地に橙黄色の斑紋がある。体色、斑紋ともオスメスでほとんど差がなく、成熟してもあまり変化がない。複眼は未成熟なうちは淡い灰褐色だが成熟するとオスは青灰褐色、メスは緑灰褐色に輝く。翅はほぼ透明で、メスは通常前縁に沿って黒条が発現するが、ほとんど現れない個体もある。4月下旬~6月にかけて出現する。オスは水面上ホバリングを交えて飛翔し、縄張りを形成する。メスは水際の植物などに静止して腹端に卵塊を形成した後、浮葉植物の繁茂する水域に飛来して放卵する。

2. 分布

国外では朝鮮半島と中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では島田市、菊川市、牧之原市、掛川市、磐田市、浜松市、古くは三島市でも記録がある。

3. 生息環境

主に平地や丘陵地の、周囲に樹林があり、抽水植物や浮葉植物が適度に繁茂する、水質の良好な深くて大きい池沼に生息する。

4. 生息状況

産地は西部地域に点在するが、個体数はいずれの産地でも多くない。磐田市、浜松市に現存産地がある。他の市町では改修工事や埋め立てなどの人間活動や、ブラックバスの人為的な導入により産地は消失した。

5. 減少の主要因と脅威

水生植物が豊富な比較的大きく深い池沼という環境そのものの消失、コンクリート護岸などによる環境の変化(12)などの要因が考えられる。また家庭排水や化学肥料の流入などによる水質悪化(31、32)も影響を与えている。本種は水面近くを巡回飛翔する性質があり、ブラックバスによる捕食の影響(52-3)を大きく受けていると思われる。

6. 保護対策

本種に適した水域とそれに続く陸域の広範な生息環境を保全する。また浮葉植物の確保は本種にとって重要と思われる。また、水面近くを巡回飛翔する習性から、ブラックバスによる食害は大きな影響を及ぼしている可能性があり、あらゆる手段で食害を防ぐ必要がある。現在ブラックバスなどの外来魚が未侵入の環境では、侵入を防止するとともに、重要な生息地では、生態系保全の観点から駆除も考慮すべきであろう。

7. 特記事項

産地はもともと限られる傾向があり、減少している地域も多い。

8. 主な文献

鶉飼貞行(1978) 静岡県中部・西部のトンボ類の採集記録. 駿河の昆虫, (102): 3028-3030

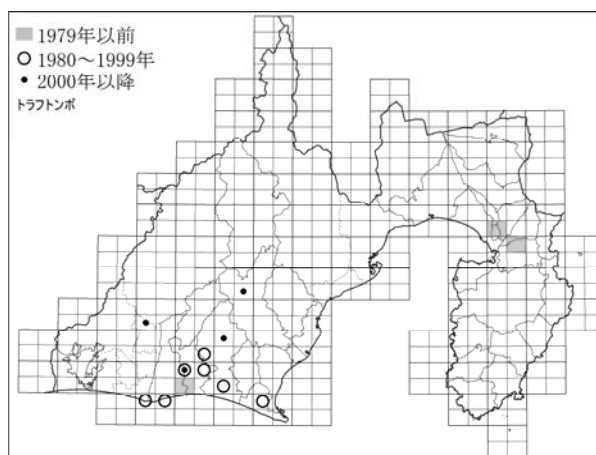
加藤哲夫(1996) 浜北市におけるヨツボシトンボとトラフトンボの記録. 駿河の昆虫, (174): 4913

9. 標本

磐田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 2003年5月3日 福井順治



(加須屋 真)

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長はオスメスとも 17~21 mm。非常に小型のトンボで、日本産では最も小さい。体色はオスでは未成熟なうちは淡い橙褐色だが成熟すると真っ赤になる。メスは黒地に黄色と褐色の斑紋がある。5月中旬~8月にかけて出現する。

オスは水辺の細い植物の茎などに静止して、縄張りをもつ。メスは単独で湿地植物の間の浅い水面に打水産卵する。

2. 分布

国外では東アジアから東南アジア、オセアニアに分布する。国内では本州、四国、九州に分布するが、千葉、東京、神奈川、山梨など静岡県東部周辺の各都県には分布していない。県内での記録は西部に限られ、一部を除き天竜川以西である。磐田市、浜松市、湖西市に記録がある。

3. 生息環境

主に平地や丘陵地、低山地の、周囲に樹林があり、浸出水などによって生じた、草丈の短い湿生植物が繁茂する湿地に生息する。また抽水植物がまばらに生えた休耕田などに発生することもある。完全な滞水ではなく、常にわずかに新しい水が供給される環境を選択する傾向がみられる。

4. 生息状況

県内での確実な産地は天竜川以西に限られる。低山地の山すそなどに生じた浸出水による湿地にみられたが、近年乾燥化が進み、本種の生息が確認できない産地が多い。既知産地周辺の休耕田などに未確認の発生地が存在する可能性もあるが、きわめて厳しい状況である。

5. 減少の主要因と脅威

生息地周辺の道路建設工事 (24) や宅地開発 (23)、湿地の埋め立て (15-1) など人間活動による影響のほか、遷移の進行、湿地の乾燥化 (54) も深刻である。貧栄養の湿地という、ごく限られた環境に依存するため、環境の変化や消失により容易に姿を消す。近年の少雨傾向や温暖化による乾燥化など (71)、自然環境の変化も大きく影響を与えているものと思われる。

6. 保護対策

生息環境そのものの保護・保全、あわせて浸出水の確保が最重要であろう。また休耕田の発生地では、土地の借り入れなどによる産地の確保と水源の確保、遷移による草原化を食い止めるための草刈りや除草といった保全活動も検討する必要があるだろう。

7. 特記事項

多くの産地でモウセンゴケ、ミミカキグサ、ヒメヒカゲといった湿地性の生物と共存している。

8. 主な文献

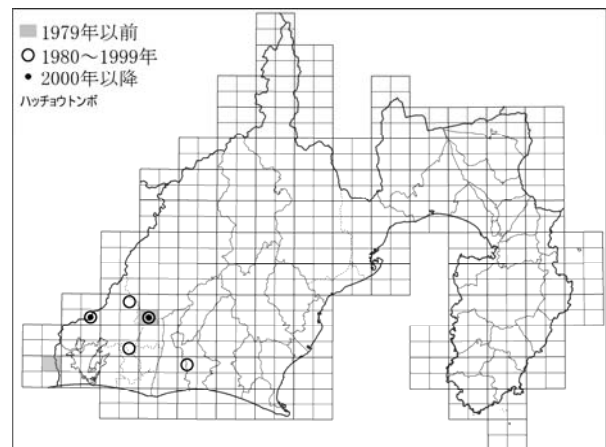
加藤哲男 (1990) 引佐郡のトンボ相 (第 1 報) . 駿河の昆虫, (152): 4353-4361

9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Kasuya
浜松市 2008年7月19日 加須屋 真



(加須屋 真)

ゲンゴロウ *Cybister (Scaphinectes) japonicus* Sharp, 1873

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

1. 種の解説

体長 34～42 mm。体はおおむね卵形で腹背に少し扁平。背面はやや緑色を帯びた黒褐色で、頭部前半と前胸背板及び翅鞘の側縁部は黄色、肢と黒褐色の胸部中央をのぞく腹面は黄色。オスの背面は滑らかで光沢が強いが、メスでは縮刻を密に装い、光沢はやや鈍い。

成虫は4月頃から活動を始め、11月頃から水中で越冬する。成虫・幼虫ともに肉食性で、他の小昆虫やオタマジャクシなどの水生生物を捕食するが、成虫は昆虫や小魚の死骸も食べる。

2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、シベリアなどに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。かつては日本各地にふつうに見られた。県内では伊豆半島、静岡市駿河区用宗、島田市金谷、磐田郡竜洋町(現磐田市)、浜松市北区引佐町で記録があり、御殿場市で採集例がある(未発表)。

3. 生息環境

ジュンサイ、ヒルムシロなどの水生植物が豊富な池沼や放棄水田、湿地に生息する。

4. 生息状況

近年確認された生息地の中で、数年以上にわたって複数個体が確認されている池は1ヶ所だけであったが、同所においても2001年以降確認されていない。

5. 減少の主要因と脅威

池沼への農薬などの流入(32)や植生遷移(54)に伴う水質悪化(31)、池沼そのものの埋め立てや護岸工事(12)などによって生息環境が失われた。

6. 保護対策

水生植物の豊富な、自然度の高い池沼を保全する必要がある。本種は分散移動することがあるようなので、好適な環境の池を作ることによってそこに定着することも十分に考えられる。

7. 特記事項

新設されたビオトープの池に出現することがある。

8. 主な文献

安立綱光(1951)伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島(伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

荻部治紀・高桑正敏(1998)旧神奈川県立博物館に収蔵されていた貴重な甲虫数種について. 甲虫ニュース, (123): 5

加須屋真・矢地信行(2002)御殿場市3つのトンボ誘致実験池のトンボ. 駿河の昆虫, (198): 5533-5537

北野 忠(2000)静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川自然保全研究会報告書, 15: 17-24

草間慶一(1983)9 ゲンゴロウ. 杉山恵一 編, 静岡県の重要昆虫-静岡県の自然環境シリーズ-, pp. 130-131. 第一法規出版, 東京.

油井雅樹(1995)静岡県におけるゲンゴロウの記録. 月刊むし, (298): 14-15

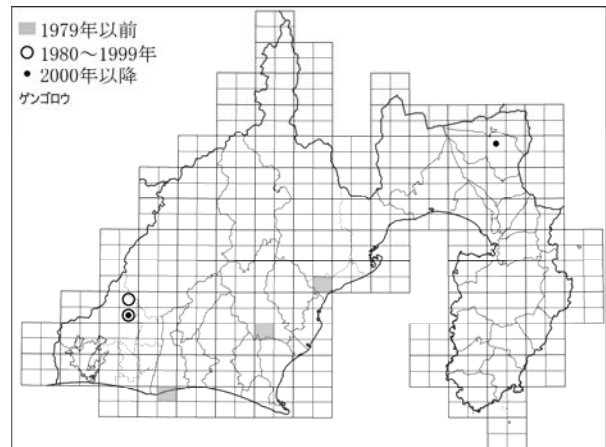
油井雅樹(1997)静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録. 駿河の昆虫, (179): 5021-5023

9. 標本

掛川市産: 神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵



©2019 Y.Tahira
浜松市北区産 2001年8月12日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

オオコブスジコガネ *Trox (Omorgus) chinensis* (Boheman, 1858)

コブスジコガネ科 Trogidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-⑤)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

1. 種の解説

体長 11.0～13.1 mm。大型で厚みのある体型。頭楯は三角形で、前縁は強く上反する。触角柄部は強く湾曲し、末端手前で第2節と接続する。小楯板は3葉片状。前脚脛節端は円く広がる。

成虫は5月から9月頃まで見られる。夜間しか活動せず、日中は砂中に深く潜っており、夜間に海鳥の死体や打ち上げられた魚の死体などに集まるほか、灯火にも飛来する。成虫で越冬すると考えられている。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、インドシナ半島に、国内では本州、四国、九州、伊豆諸島分布する。県内では伊豆半島と磐田市で記録があり、また、古くは1940年代に静岡市や沼津市で記録されているようであるが、当該文献を入手できなかった。

3. 生息環境

自然度の高い海岸に生息するが腐敗物を好むためそれらのない砂浜には生息できず、漂着物や海生動物の死骸が多い海岸に生息する。

4. 生息状況

県内でのデータを伴った確実な生息地は磐田市のみであるが、近年は全く確認されておらず、生息状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

海岸の護岸・公園化(14)、清浄(71)などが生息への脅威となる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

東北から九州まで記録はあるが、標本が現存する確実な産地は茨城県から愛知県にかけての特定の沿岸部である。現在生息が確認できる場所は茨城県神栖市のみであるという。

8. 主な文献

安立綱光(1951)伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島(伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 編(1985)原色日本甲虫図鑑(Ⅱ). 保育社, 大阪, 514 pp.

川井信矢(2004)オオコブスジコガネの採集と飼育. 鯉角通信, (9): 1-10

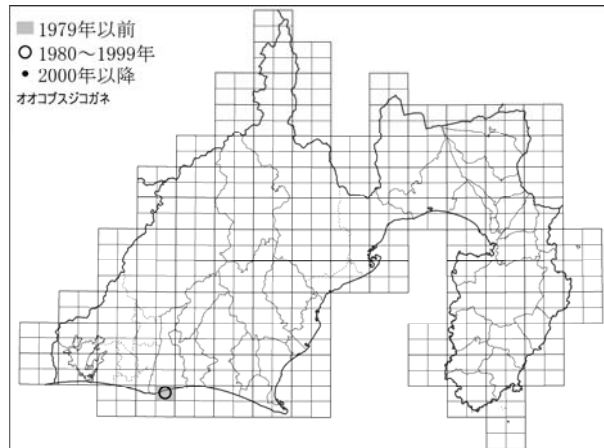
坪井俊久(1978)オオコブスジコガネの採集記録. 駿河の昆虫, (103): 3072

9. 標本

静岡市産：東京農業大学所蔵



©2019 Tokyo University of Agriculture
静岡市産 1943年9月 東京農業大学所蔵



(多比良嘉晃・石川 均)

クモマツマキチョウ *Anthocharis cardamines hayashii* Fujioka, 1970

シロチョウ科 Pieridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②)変更コード 1, 3, 6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

1. 種の解説

開張およそ 40 mm。オスは白地に表面前翅半分の先端部分が赤黄色となり、メスはこの部分が灰色の小さい斑紋になる。裏面は後翅が緑の唐草模様となる。幼虫の食餌植物はミヤマハタザオやヒロハコンロンソウ。蛹で越冬。成虫は年 1 回発生し、標高が 1,000 m 程度の場合は 4 月下旬から発生し、2,000 m ほどの場合は 7 月にも見ることがある。溪流沿いを直線的に飛翔し、ミヤマハタザオやモミジイチゴなどで吸蜜する。

2. 分布

国外では東はロシアからヨーロッパのユーラシア大陸に広く分布し、国内では本州中部山岳地域のおよそ標高 1,000~2,000 m に生息する高山蝶の一種である。県内では南アルプスに源を発する河川の源流部から記録がある。

3. 生息環境

2,000 m を超える高山を源とする河川の渓谷部の河原、崩壊地、時に林道沿いなどで、樹木が点在する攪乱された明るい環境が生息地となる。

4. 生息状況

1957 年、静岡市葵区大井川源流西俣において本県で初めて発見された。2016 年現在でも大井川上流域には広範囲に生息しているものの、2000 年代になって激減している。静岡市葵区梅ヶ島の生息地は 1970 年代までは個体数は少なくなかったが、現在では危機的状況である。浜松市天竜区水窪町では 1973 年に発見され、最近まで断続的に少数が確認されているに過ぎない。

5. 減少の主要因と脅威

生息地となっていた河川や溪流の状況が、大雨による洪水や (55)、法面のモルタルなどの吹き付けなど様々な工事 (24) により変化し、これらが頻繁に起こることで植生が回復できないことが大きく影響していると考えられる。また、ニホンジカにより食草をはじめとして、成虫の吸蜜植物も被害を受けていることも要因と思われ (54)、また採集圧も危惧される (41)。

6. 保護対策

溪流や山腹の工事の影響は小さくはないが、時間の経過とともに以前の状況に戻り、生息環境が回復することもある。ニホンジカの影響はきわめて大きく、個体数密度を下げる措置を緊急に図る必要がある。

7. 特記事項

長野県では県の天然記念物、県の希少野生動植物に指定されている。

8. 主な文献

春田俊郎 (1958) 大井川上流のクモマツマキ. 駿河の昆虫, (21): 552

石川由三 (1959) 大井川源流地方 (5 月下旬) の蝶類. 駿河の昆虫, (27): 700-706

小堀 一 (2016) クモマツマキチョウの早い時期の記録. 駿河の昆虫, (256): 7007-7008

大庭俊司 (1974) 1973 年水窪町奥地のチョウ報告. 駿河の昆虫, (84): 2450-2452

高橋真弓 (1982) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 19 報). 駿河の昆虫, (117): 3438-3448

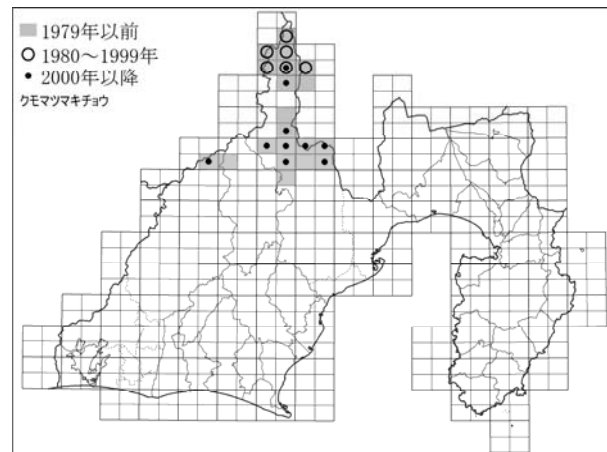
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♂表面 2015年5月26日 諏訪哲夫採集



静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN)]

1. 種の解説

開張およそ 60 mm。翅の表は一様に白色で裏は翅脈に沿って黒色となる。後翅の基部は黄色となる。幼虫の食餌植物はヒロハヘビノボラズやメギ (メギ科)。幼虫で越冬。年 1 回、7 月中旬から発生し、8 月中旬まで見られる。成虫は灌木や高木の上を緩やかに飛翔し、クガイソウ、ミヤマイボタ、ヒヨドリバナの花に吸蜜に訪れる。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国南部、ロシア南東部に分布し、国内では本州中部山岳地域の標高およそ 1,000~2,000 m に限って生息する高山蝶の一種である。県内では静岡市葵区の大井川源流部のみに生息している。

3. 生息環境

生息地は亜高山帯の、主に溪流沿いの食樹のヒロハヘビノボラズなどの灌木を混じえる林縁で、ヒヨドリバナなどの吸蜜植物の多い斜面でよく見られる。

4. 生息状況

静岡市の北部に限って生息し、1959 年静岡市葵区梅ヶ島の記録の 1 件をのぞくとすべて大井川源流に限られる。1951 年が確実な最初の記録で、西俣、東俣からは多くの記録があり、最下流の記録は畑薙第 1 ダムである。1990 年代までは大井川源流各地に個体数も多かったが、近年は個体数が激減している。

5. 減少の主要因と脅威

道路法面の崩壊や各種の工事 (24) などにより、林縁に生育する食草や成虫が吸蜜する花が減少したことが考えられる。また、植生遷移により森林化が進み、食草の生育に影響を及ぼしている (54)。

6. 保護対策

長野県では保護活動が行われている。本県でも何らかの対策が緊要である。

7. 特記事項

隣接の長野県と山梨県では絶滅危惧 I B 類 (EN) にランクされ、県の天然記念物に指定されている。

8. 主な文献

- 天野市郎 (1987) 赤石岳と大井川上流部の蝶類採集報告. 駿河の昆虫, (138): 4001-4003
- 池谷 正・鈴木英文・諏訪哲夫 (2014) 大井川上流 7 月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (245): 6737-6738
- 高橋真弓 (2000) 大井川水源地方蝶類分布調査布告 (第 24 報). 駿河の昆虫, (191): 5360-5361
- 宇式和輝 (1960) 安倍川上流地方蝶類分布調査報告—1959 年夏一. 駿河の昆虫, (30): 781-798
- 宇式和輝 (2006) 大井川源流域・二軒小屋地域の蝶 [I・2000 年]. 駿河の昆虫, (216): 5983-5993

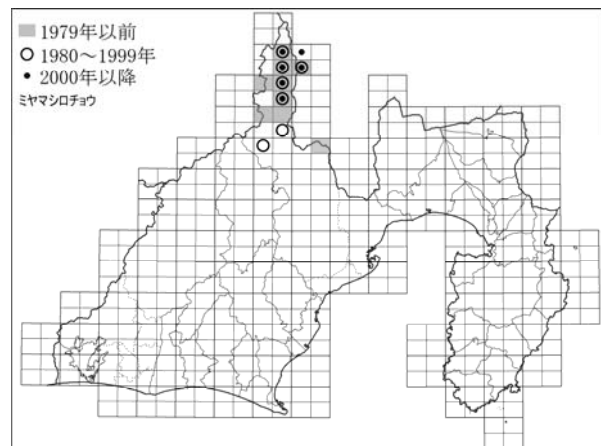
9. 標本

静岡市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♂表面 2015 年 7 月 24 日 諏訪哲夫採集



ベニモンカラスシジミ *Fixsenia iyonis surugaensis* (Fujioka, 1981)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②) 変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

1. 種の解説

開張およそ 25~30 mm。翅の表は黒褐色、裏は茶褐色をしている。翅の表には赤い斑紋があり、特にオスでは大きく広がる。幼虫の食餌植物はクロウメモドキ。卵で越冬。成虫は年に1回6月に発生する。地味な色に加え、薄暗い森林の中に住み、人目に触れることは少ない。

2. 分布

国外では中国大陸西部に、国内では長野県南部から静岡県北部、紀伊半島、中国山地、四国山地と大きく四つの地域に分布する。県内では浜松市天竜区水窪町のみから記録がある。

3. 生息環境

幼虫の食樹であるクロウメモドキが生育する薄暗く、やや湿った林縁または林縁に近い林内を好む。石灰岩が露出するような場所との結びつきが強い。

4. 生息状況

県内では1975年、浜松市天竜区水窪町において初めて発見された。それ以降記録の発表が採集者を招きかねないためか、公表された記録は少ない。記録地点は天竜川支流の水窪川水系に限られ、天竜川本流や支流の気田川水系からは見つかっていない。成虫の生息地の状況や習性から成虫を採集することは大変困難で、これまでほとんどが卵あるいは幼虫で記録されたものである。

5. 減少の主要因と脅威

クロウメモドキはもともと多い木ではないが、一層減少が目立つ。植林内では下草刈りで切られる

(71) 一方、放置された林床は暗くなりすぎて、若木が育たない(53)。加えて近年ではシカの食害(54)により若木が食われてしまい、古い木が寿命で枯死し、新たに更新されない。さらに道路改修(24)、河川改修(13)などの際にしばしば切られている。採集圧は一時ほどではないがまだ残っている(41)。

6. 保護対策

食餌植物に対するニホンジカによる食害を守るため緊急な対策が必要である。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

福井順治(1976a) ベニモンカラスシジミに関する新知見. 東海自然誌, (2): 45-46

福井順治(1976b) 佐久間・水窪の蝶類(Ⅱ). 駿河の昆虫, (95): 2793-2796

白井和伸(2004) 水窪町におけるベニモンカラスシジミについて. 駿河の昆虫, (205): 5711

諏訪哲夫(2002) 静岡県水窪町のベニモンカラスシジミ生息地の消滅と過去の記録. 駿河の昆虫, (200): 5593

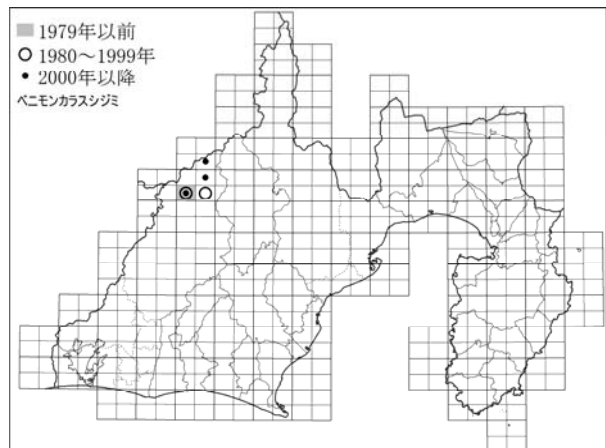
9. 標本

浜松市産(少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa
浜松市産♀裏面 2013年5月12日羽化 諏訪哲夫飼育



ヒメシジミ *Plebejus argus micrargus* (Butler, 1878)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

開張およそ 30 mm。オスの表面には青色が広がり外縁は 1.5 mm ほどの黒色の縁どりがあり、裏面は白色の地に黒点が散らばり、特に後翅の縁に橙色の三日月形の紋が連続する。メスの表面は黒褐色でわずかに後翅に三日月形紋が現れる。幼虫の食餌植物はノアザミ、ヨモギなどが主体であるが、食性の幅はたいへん広く 10 科 30 種以上にも及ぶ。卵で越冬。年 1 回 6 月中旬から発生し、8 月上旬まで見られる。草原に生息し各種の花で吸蜜する。

2. 分布

国外ではサハリン、朝鮮半島、中国東北部よりヨーロッパにかけて広く、国内では北海道、本州、九州に分布する。県内では富士山麓の標高 800~1,800 m の草原や火山荒原から記録がある。

3. 生息環境

富士山麓に広がる標高 800~1,800 m の草原や火山荒原に生息する。キリンソウ、チダケサシ、カセンソウ、ワレモコウなどが生育する多様性豊かな草原が主な生息地であるが、メイゲツソウ、フジアザミ、カリヤスモドキなどがパッチ状に広がる火山荒原にも局地的に生息している。

4. 生息状況

小山町では 1988 年籠坂峠、裾野市では 1977 年日本ランド、富士市では 1988 年東白塚、富士宮市では 2000 年代の初めの記録が最後となるなど、多くの生息地が失われた。現在は御殿場市の標高 1,500~1,800 m の地域のみとなっている。ここのパッチ状の植生は拡大しているように見えるが、本種の生息地は拡大していない。

5. 減少の主要因と脅威

各種の開発 (16) により草原が減少し、残された草原も採草のための火入れなどをしなくなったことによる草原の質の低下 (53) と、遷移の進行により (54)、本種の生息に適さなくなったためと考えられる。

6. 保護対策

御殿場市の生息地が小山町須走富士山登山道に向けて拡大していくことが期待される。

7. 特記事項

生息する草原の衰退が全国的に顕著であり、本種は神奈川県ではすでに絶滅しており、山梨県では準絶滅危惧 (NT)、愛知県では絶滅危惧 I A 類 (CR) にランクされている。

8. 主な文献

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶。駿河の昆虫, (144): 4153-4155

諏訪哲夫 (2008) 県に寄贈された小松庄次郎氏の蝶類標本。駿河の昆虫, (223): 6183-6191

高橋真弓 (1977) 富士腰切塚および二ツ塚のヒメシジミについて。駿河の昆虫, (99): 2914

高橋真弓 (2000) 1995~1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録。駿河の昆虫, (190): 5321-5332

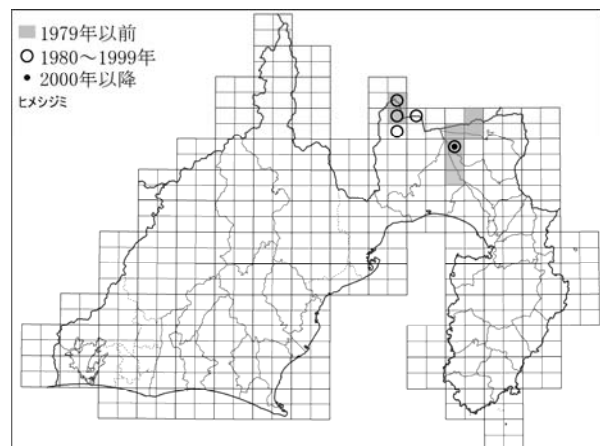
谷川久男 (2014) 富士山御殿場口のチョウ。駿河の昆虫, (246): 6771

9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 T.Suwa
御殿場市産♀裏面 2016 年 7 月 30 日 諏訪哲夫採集



(諏訪哲夫)

コヒオドシ *Aglais urticae esakii* Kurosawa & Fujioka, 1975

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 50 mm。表面は赤褐色の地に黒色の紋がある。裏面は前翅の一部が黄褐色となるが後翅など一様に枯葉状の黒褐色。斑紋はオスメス大差ない。幼虫の食餌植物は本県では記録がないが他県の例などではコバノイラクサなど。成虫で越冬。春休眠から覚めた個体が山を下りて産卵し、7月中旬頃から成虫が現れる。飛び方は敏速で高山の各種の花で吸蜜する。

2. 分布

国外ではサハリン、朝鮮半島のほかユーラシア大陸に広く、国内では北海道及び本州中部山岳地帯に分布し、本州では高山蝶の一種である。県内では南アルプスの農鳥岳、赤石岳、悪沢岳など 3,000 m 級の高山のほか、西俣、東俣などの溪谷、標高の低い樫島からも記録がある。

3. 生息環境

成虫は高山の石礫の多い尾根やお花畑で見られるほか溪流沿いでも記録されている。食草となるイラクサ類は湿潤な場所を好むことから溪流沿いに生育しており、成虫の発生場所となる。羽化後高山帯へ移動したものが高山で観察される個体である。

4. 生息状況

1950年代から1960年代に、大井川源流部の西俣、東俣の溪流部から記録があるほか、農鳥岳、赤石岳、上河内岳、悪沢岳などの高山帯から記録がある。1970年代には報告された記録はなく1980年代には荒川小屋、悪沢岳、1990年代には聖岳での目撃記録しかない。2000年以降の記録は報告されていない。

5. 減少の主要因と脅威

県内において発生が確認されたことはないが、県外の例では食草の生育する溪流沿いが主な発生地となっている。シカによる食草の食害 (54) が原因の一つと考えられる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

天野市郎 (1987) 赤石岳と大井川上部の蝶最終報告. 駿河の昆虫, (138): 4001-4003

堀口真之 (1964) 大井川水源地方の蝶. 駿河の昆虫, (47): 1277-1280

白井和伸 (2003) 南アルプスの蝶類調査記録 (1998年). 駿河の昆虫, (202): 5641-5644

高橋真弓 (1962) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第9報). 駿河の昆虫, (39): 1067-1075

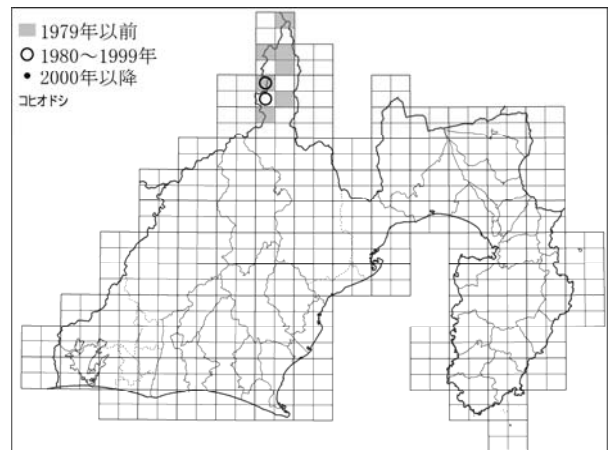
富山 稔・梅沢賢造・青島 弘 (1962) 大井川上流の蝶類. 駿河の昆虫, (38): 1045-1047

9. 標本

静岡市産 (3 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Takahashi
静岡市産♂表面 1955年8月17日 高橋真弓採集



(諏訪哲夫)

ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata nipponica* Murayama, 1969

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②③)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

1. 種の解説

開張およそ 35~40 mm。翅の表面は一様に黒褐色をしている。裏面は暗褐色と白色の細かい波模様があり、前翅に1個、後翅に3個の目玉模様がある。幼虫の食餌植物は各種のイネ科、カヤツリグサ科の草本。幼虫で越冬。成虫は東部では年に1回、西部では年2回発生する。

2. 分布

国外ではロシア南東部、朝鮮半島、中国、台湾に、国内では本州、神奈川県（絶滅）以西の西日本に限られる。県内では東西二つの分布域に分かれる。一つは原野谷川以西で、西日本一帯に連続する。もう一つは、富士川以東の、富士山南西麓~東南麓の地域及び伊豆半島北部から記録がある。

3. 生息環境

平地や低山地の、草地と林の境目の明るい場所に生息する。いわゆる里山の周辺や、用水、小河川の土手、河川の堤防、湿地など様々なごくふつうの環境から見つかる。

4. 生息状況

中伊豆地域では1960年代には姿を消し、函南町、旧伊豆長岡町などでは1980年代の終わりには記録が途絶えている。富士地域は1970年代には姿を消した。西部においては旧引佐町は1970年代の終わり頃、旧掛川市が1980年代の終わり頃、旧天竜市、旧豊岡村は1990年代に姿を消している。現在生息が確認されているのは、伊豆では伊東市、西部では森町、旧浜北市、旧三ヶ日町の限られた地域のみである。

5. 減少の主要因と脅威

各種の開発(23)、道路建設(24)に加え、里山の荒廃が進んだため、低山地や人里近くの雑木林そのものが失われた。残された林にしても、放置され、活動空間が失われた(53)。また、農道の舗装による微気候の変化(71)も無視できない。産地の孤立化で近親交配(62)が進むと、世代交代ができなくなる。以前ほどではないが採集圧(41)もあり無視できない。

6. 保護対策

里山の保全や環境整備が図られることで本種の存続も期待できる。

7. 特記事項

神奈川県、山梨県では絶滅したとされる。日本産種の分類上の扱いについては検討すべき点もある。

8. 主な文献

大庭俊司(1970) 磐田原台地のヒメヒカゲとウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (70): 2045

清 邦彦(1963) 富士南麓のウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (44): 1177-1178

白井和伸(1986) ウラナミジャノメ分布調査. 駿河の昆虫, (135): 3922-3923

諏訪哲夫(1989) 静岡県西部のウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (145): 4184

高橋真弓(1962) 1962年静岡県東部のウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (39): 1081-1082

高橋真弓(1965) 静岡県とその周辺における *Ypthima* 属の分布. 駿河の昆虫, (52): 1430-1446

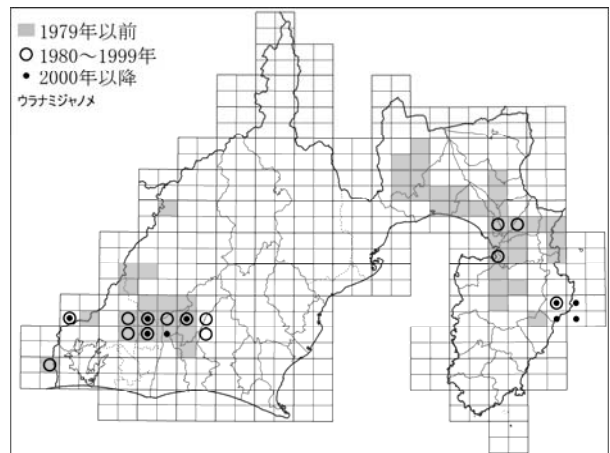
9. 標本

各産地(多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



周智郡森町産♂裏面 2012年6月13日 諏訪哲夫採集



オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)

ヤガ科 Noctuidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 変更コード 6, 7

[2004 年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

開張オス 40 mm 内外、メスは 50 mm を超える。オスの触角はやや鋸歯状。前翅は黒ずんだ暗褐色、中室下縁に沿う黒色条と中室端に 1 小白点を呈する。後翅は黄白色。成虫は年 1 化、7~8 月に出現する。大型の湿生単子葉植物の borer で、ガマの茎内から幼虫がえられている。

2. 分布

国外では、イラク、中国（黒龍江省）、ロシア南東部に、国内での産出は局地的で北海道、本州、九州に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼、浜松市南区松島町天竜川河口（遠州浜）で記録がある。

3. 生息環境

ガマなどの生育する湿地。

4. 生息状況

磐田市桶ヶ谷沼では 1986 年の記録があるのみで、2002 年の調査まで生息が確認されていた浜松市南区松島町天竜川河口（遠州浜）の生息地は最近消失した。

5. 減少の主要因と脅威

磐田市桶ヶ谷沼で確認できない理由は不明だが、本種の生息環境である湿地環境は、開発（15-1）、遷移（54）などで減少している。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

環境省 編（2015）の改訂版レッドデータブックに記載されるようになった種である。

8. 主な文献

小木広行（1982）オオチャバネヨトウとキスジウスキヨトウの幼虫．誘蛾燈，（87）： 11-13

浦山幸夫（1988）磐田市桶ヶ谷沼の蛾．駿河の昆虫，（142）： 4083-4088

枝恵太郎・四方圭一郎（2011）ヤガ科キリガ亜科．岸田泰則 編，日本産蛾類標準図鑑 II，pp. 323-367．学研教育出版，東京．

9. 標本

浜松市南区松島町産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（枝恵太郎）



浜松市産♂表面 2000年6月14日 浦山幸夫採集

